

# 「死者の妻たち」に於て本当に起った出来事

鵜 木 奎 治 郎

## I

Hawthorne の “The Wives of the Dead” は読めば読む程、解釈に苦しむ作品である。描かれている事件そのものは簡単である。プロヴィンス湾 (The Bay Province) に面する港町の家に同棲していた、最近続けて二日間の間実の兄弟であった夫たちを事故で亡くし未亡人となったばかりの、“two young and comely women” が体験した(?) 一夜の経験がその内容である。物語は、最初は、弔問客が去った後の気愈く陰鬱なある秋の雨の日の黄昏から始る。煩わしい弔問客たちが一応すべて帰宅する。夜中にまず興奮し易い性格の Margaret が、ノツクの音で眼を覚まして自分の夫の生存を知らされ、もちろん歓喜するが、この自分だけにふってわいた (とこの時点に於て信じた) 幸運を Mary に知らずことにはためらいを感じ、再び不安定な眠りにおちていく。今度は時をおいて雨が止み嵐が静まって月の光がさしかけた頃、二回目のノツクの音で、平穩な性格の Mary が眼を覚まして、やはり自分の夫の生存を知らされるが、これも同様に自分だけにふってわいた (とこの時点に於て信じた) 幸運を、Margaret に知らずことに強いためらいを感じ、Margaret のベッドに近づいて、一掬の涙を流した途端に「彼女は突然眼を覚ました。」という結末を迎えるのである。問題は一番最後の文にあると H. J. Lang は指摘する。即ち “But her (=Mary’s) hand trembled against Margaret’s neck, a tear also fell upon her cheek, and she suddenly awake.” (italic Unoki’s) という Hawthorne の原文で示されるいささか唐突な結末をどう解釈するかである。

このあまり著名でない作品について Lang は殆んどの解釈を渉獵し尽くしたあげく、手短かに要約してみせる。まず、現実的な作品として解釈した Arlin Turner によれば、これは姉妹が各々の夫の生存を知らされた時の反応を書いたもの<sup>2</sup> であり、同様に Mark Van Doren の解釈でも、悲哀と死の雰囲気の漂う Hawthorn の傑作であるが、その効果は最後に至って奇妙に淨福感を漂わせていて説得力がある<sup>2</sup> と紹介されている。A. Turner と M. V. Doren の解釈によれば、二人の主人は生きていたことになるわけである。Lang によれば、この作品を夢として解釈した例は (彼がこの論文を書いた時点に於て) 僅か二つであったとし、その中の一つである H. Levin の「空しく自分たちの主人の生還を期待した未亡人たちの裏切られた夢<sup>2</sup>」という説を紹介し、彼 Lang 自身もこの説に与しているのである。

即ち Lang によれば、この作品は夢として解釈するか、現実の話として解釈するか二者択一あるのみである。そして結局彼は Mary の見た夢としてのみ理解出来ると考える。まず既に引用した結末の一節をとりあげ、統語論的にみて “she” を Mary と見なければ、文意

が徒らに晦渋になるのみだという。即ち、Mary の涙で Margaret が目覚めたのではなく、Mary 自身が目覚めたというのである。Lang によればもし Margaret が目覚めたという解釈をすれば、一たん死んだと思われた二人の主人公は生還したことになるが、そのようにあまりにも説得力のありすぎる解釈では Hawthorne のように注意深く結論を急がぬ作家にしては相応しくない結論であり、これはやはり一種のどんでん返し (surprise ending) に他ならないというのである。だがすぐ起る疑問は、Lang の言葉遣いをそのまま真似れば、果して Hawthorne のように結論を急がぬ作家が、種のはっきり割れるどんでん返しを作品の結末に加えているであろうか。N. F. Doubleday は、この Lang の見解をとるならば、この作品の語り手が不正直であったとせねばならぬと反論している<sup>3</sup> が、私も当時どんでん返しを駆使するような、O. Henry ばりの現代風な小説技術があったのかどうかということになると、疑わざるを得ないのである。

次に Lang は、この話を事実として読めば、同時に二人の主人が死んで又同時に二人とも生還することになり、これは極めて可能性の少い偶然という他はなく、従って夢として理解した時だけ納得されるというのである。だが果して現実の世界はそんなに偶然性の乏しいものであろうか。Lang の主張の背後には、小説の世界は必ず現実の世界よりも偶然性に乏しいものであるという形而上学があることになる。このような形而上学は証明することも反論することも出来ない。だから論理的裏づけがないままで、一応 Lang の言分に基づいて、この作品がすべて Mary の夢であると解釈してみよう。すると、Freud の用語を借れば Mary の顕現夢の中に Mary の潜在思想を探ることになる。そうすると「二人の主人は死んでいる<sup>2</sup>」という結論になると Lang は述べるのである。だが、ここでもすぐ疑問が起る。別に二人の主人が死んだと解釈しなくてもよい場合があり得る。例えば Mary は全く純潔で心の優しい女性として描かれているのだが、ここで全く機械的に精神分析的な考察を Mary の心を対象にして行ってみる。ということは Mary の心の中にも、いくらかの悪の要素が無意識として隠れていたということになる。(Mary の夢の中に登場して来る) Margaret の状況はどうであろうか。(Mary の夢の中では Mary よりも早く眼を覚ました) Margaret の受け取った情報というのは、一たん死んだと思われていた十三人の中に、Margaret の主人がはいっていて、その中の一人として生還するという事になっている。十三とは不吉な数である、この数字の中に Mary の願望、即ち Margaret の夫だけが生還するというようなことは決してあって欲しくないという願望が込められているのではあるまいか。

又、(Mary の夢の中で) Mary の主人が生還したという情報を持って来てくれた男 Stephen は、彼女に昔求婚した男である。従って彼女は自分の夫が生還したという事実よりも、昔の求婚者が深夜訪問してくれたという事実の方が嬉しいのである。当然その情報を聞いて歓喜に震えるが、その喜びを抑制しようとしているのか、意外にも Stephen に対する態度はよそよそしい。この場合、自分が Stephen と結婚していたら、自分の夫を失うという悲運にあわずにすんだのではなかったかという無意識な考え方が、Freud のいう所謂夢の検閲を受けたのではないかと見ることができる。Stephen のもたらしてくれた情報は自分の夫の生還なのだから、それが事実なら Stephen と再婚することも出来ないわけである。

ところで Freud によれば夢の中のある特定の要素をそれ本来の意味に解釈すべきか、それとも象徴的に解釈すべきかは全く解釈者の勝手な意志にゆだねられるのである。だから

(Mary の夢の中で) Stephen が Mary の夫の生還という情報をもたらしてくれたということを、reality のレベルで解釈することも、symbolism のレベルで解釈することも全く解釈者の自由になるわけである。さらに Freud によると「夢の作業では相反するものが一致するために、ある種の要素は積極的の意味にとるべきか、それとも消極的意味にとるべきか、すなわち、そのままの意味にとるべきか、それともその反対の意味にとるべきかは、つねに未決定のままに残されて<sup>4</sup>いるのである。だから (Mary の夢の中で) Stephen が Mary の夫の生還という情報をもたらしてくれたということを、重大視してもかまわないし軽視してもかまわないということになるのである。従って、同じ資料を用いて、全く逆な解釈も又可能になるわけである。

ということは、Mary の心が悪の方角ではなくて善の方角に傾斜していたと決定することに他ならぬ。即ち (Mary の見た夢の我われに与えてくれる情報が、善である Mary の潜在思想を物語っているのだと考えるならば) 事実 Mary の夫だけが生還し、夢の中でも事実<sup>5</sup>に極めて近い内容となって現れたのだと解釈するわけである。この場合、Margaret の夫がやっと生還し得た十三人という不吉な数字の中にはいっていたということの意味は、Margaret の夫が事実上は生還しなかったのにもかかわらず生還し得たという夢になって現れたわけだから、Margaret を気の毒に思う思い遣りと Margaret の悲惨な運命が調和しあって夢の中の不吉な数字となって象徴的に表現されたことになる。妥協の所産が夢ということになったのだ。Stephen に対するつれない態度は、Stephen と彼女の夫が両方とも船員という同じ職業であるだけに、吉報をもたらしてくれた Stephen が一瞬、Mary 自身の夫と同一視されたのだとも解釈され、ここで Mary の夢はあまり喜びすぎでは未亡人になった Margaret に申し訳がないという倫理的検閲を受けたのである。

ところで Freud は、夢を常に人格の深層にある不合理な部分の表現と見なしたが、一体人格のどの部分が深層でありかつ不合理なのであろうか。我われは Freud にならって、その部分は無意識な悪の部分であると答え勝ちである。そして Hawthorne の “The Haunted Mind” の如き essay を手がかりとして、Hawthorne を以て Freud 的思想の先駆的表現と見る見方もないわけではない。だがもし Hawthorne が原罪観にとりつかれていて人間の本质を悪だとみていたとすれば、Hawthorne は Freud と立場が逆になり、Hawthorne 的人間像ではその顕在部分が悪で、潜在部分には善があると見ていたことにならないだろうか。Hawthorne 的人間像の深層部分にある無意識は、Freud 的な悪の無意識ではなくて、かなりの程度に迄合理的な善(「善」という言葉は定義し難いが、ここでは人間の未来を信じるという意味で使っておく。)だったという解釈も出来るのではなかろうか。このような解釈が成り立つとすれば、今迄分析したように、Mary の心が悪に傾斜するにせよ善に傾斜するにせよ、いずれの場合でも人間の善意というものが無意識層に措定されていたと考えなければならない。それは、Mary が彼女の善意で以て何を願っていたのかという祈りを推定することに他ならず、しかもその推定を素直に評価することである。Freud の分析はともすると悪しき動機をすべての行為の中に見つけようとする傾向がある。この点について、夢の学説の多くが Freud に基盤を有することを容認しながらも、なお「夢は我われの心の中の最も低級にしてかつ不合理な機能および高級にして最も価値ある機能の両方の表現する」<sup>6</sup> 事実を直視した E. Fromm の解釈は、極端な Freud 的精神分析学の欠陥を補ったものだとも考え

られる。

以上の点に留意しつつもう一度 Lang の分析の結果だけに注目してみる。それはすべてを Mary の夢と見る解釈であった。だが例えば Margaret と Mary という二人の女性が別々に見た夢が、継時的によどみなく統合されたために、あたかも一つの夢であるかのように見えるのだとも言えないだろうか。作品のほぼ中央部の辺りで、Margaret は自分の夫の生還を知って Mary の安否を気づかいつつ、平安とは決して言えない眠りに入る。その直後に主役は突如として Mary に交替する。Hawthorne の原文に基づけば次のようにこのくだりは描写されるのだ。“When the night was far advanced, Mary awoke with a sudden start. A vivid dream had latterly involved her in its unreal life, of which, however, she could only remember that it had been broken in upon at the most interesting point.”<sup>6</sup> この時点で話は転換する。前半の Margaret の夫が生還した部分は Margaret の見た夢で、後半の Mary の夫が生還した部分は Mary の見た夢であると解釈するのも一つの方法である。一人が起きている時はもう一人の別な女性は必ず眠っていたという条件があまりにも見事に整いすぎているからである。だが、この条件は、やはり Lang の分析と同様に Mary 一人の見た夢であったと解釈してもあてはまるのである。Hawthorne の原文によると Mary の夢は「一番面白くなった時点で急に中断された」というのであるから、当然この中断の時点迄は Mary が面白がっていたわけである。この小説のすべてが Mary の夢であるとする、この中断された時点までの Margaret の夢に関する部分も Mary の夢となる。即ち Mary は最初 Margaret が夢を見たという夢を見、次いで自分自身に関する夢を見て、最後に目覚めたということになる。これは Lang の結論と同じであるが、その結論に到達するために利用した資料は、Lang の場合とは異っていたのだ。註6で引用した Hawthorne の原文から抜いた一節が新しい資料であった。しかしこの一節は、この作品を reality のレベルで読めば文字通りに Margaret の見た夢と、Mary の見た夢を分ける分岐点とも見なし得るのであった。我われは又もや同じ資料を用いて、全く逆な解釈をすることが可能となったわけである。我われは Lang の下したすべてを Mary の夢として裁断するという図式一つをとり上げてみても事態がこのように紛糾するのを知ったのである。Lang は、Hawthorne に関する批評はともすれば二元性の指摘とか、人間性を善良にして同時に邪悪なる本質と見なすといった体の、比較的単純で突りの少い説明に終始していると指摘しているが、私の見るところでは Lang 自身の解釈が自ら戒めたこの単純な図式に従っているように思われる。結論自体は Mary の夢ということになるにしても、そこから簡単に二人の夫が死去したという事実がどうして演繹出来るのであろうか。Hawthorne 独特の曖昧さは重層的に絡みあって、この作品に関する限り二者択一的な分析による断定を許さないものがあるように思われる。

## II

それでは私は Lang の解釈に真向から反対しているのだろうか。結論を先取すれば、とに角 Mary の夢であると断定した Lang の裁決のみには、替意を表すのに答ではない。前節で吟味した私自身の方法も、おおむね Mary 自身の夢と見る見方で貫いて来たつもりである。だが Freud の注意した通り、解釈者である私の解釈一つで、即ち私の力点のおき方

一つで、この夢の全部が、あるいは後半だけが、Margaret の夢であると見なす全く別な解釈も可能かもしれない。最終的な推定を下す前に、精神分析的な裁断法の枠組を越えた思考を試みる必要があるであろう。このような精神分析学は Hawthorne の時代にはなかったのである。だからかえって精神分析学的手法で作品を裁断し得る筈だとも言えるかもしれない。なぜなら、もし作家がこの手法を熟知していたなら、この手法を意識してこの分析の期待にことさら合致するように、あるいはわざと背反するように、作品を構成してみせるかもしれないからである。だが、そういう態度は、いずれも精神分析学を強く意識した態度なのであるから所詮は精神分析の枠組をまぬかれることは出来ない。しかし Hawthorne にはそういう意識はまるでないのだから、自由な態度で作品を構成した筈だ。そしてこの場合は、精神分析学の教条的公式に沿っていないのだから、その公式から外れる部分も又少ないのである。

以上の注意書きを念頭に於て、もう一度 Lang の分析の結果に焦点をあててみる。それは分析の態度を中止して、素直な気持で一たん Lang によって否定された、reality のレベルにもどしてこの作品を読み返してみるということである。我われは、これは誰の夢か、夢を見たとすればどこからどこ迄かと言った体の苦勞を払うのを中止してみる。そして Hawthorne は、この作品が分析の試金石となるだろうということは予想せずに、もっと自由な気楽な態度で、極端に言えば、知性を使わずに感性で書いたのだと考えてみる。すると、これは作品の中の人物の行動をあれこれと精神分析学の俎上にのせて吟味するよりも、むしろ作者 Hawthorne の意図を精神分析学の俎上にのせて吟味した方が、遙かに効果的であるということになりはしないか。

ということは取りも直さず作者が Margaret と Mary という両者の運命の中でいずれに深い関心を寄せていたかということ吟味することに他ならない。私が先に述べた reality のレベルというのは何か。この作品はもとより精神病医のカルテではないのだから、夢の臨床記録ではない。従って実際の夢の中では現実に取り得ぬ矛盾や飛躍がいくらでも起り得るのだが、そういう要素は皆無である。実際生起した事件として読んでみても、十分納得出来る精度で描かれているのだ。その悟性で納得の出来る事件の意味を、いたずらに裏にまわって詮索する分析を一応中止して、作者の表現の善意を信じて、素直に考えてみるということなのである。そういう風に考えてみると Hawthorne がいかに Mary の方に関心を、いや同情をよせているのかということが明かになる。

まず第一に事件の渦中にあった時間は Mary の方が Margart よりも長いのだ。作品の表現している事実に素直に従うならば、Mary の夫の死の報せの方が一日早く届いている。翌日 Margaret の夫の死の報せが届くと同時に、わずらわしい弔問客たちが訪れる。弔問客が訪れたのは、初日ではなく二日目だけであったようにも読める。何故弔問客は初日の日にすぐ来なかったのだろうか。要するに弔問客が来る迄の、初めて未亡人という存在になったと言う孤独な苦しい長い一日を Mary だけが体験しているとも読めるのだ。又、最後の、Lang のいう所謂どんでん返しの場面で、Mary の涙で目を覚ましたのが Mary 自身であろうとも、あるいは Margaret であろうとも、Mary 自身が涙をこぼしたという行為が、契機となっていることは確かである。要するに Mary がこの作品の中で主人公の位置を占めている時間の方が長く、濃度も濃いのである。

第二に、最初 Margaret に Margaret の夫の生存の情報を持って来てくれた、町の親しい宿屋の主人である Goodman Parker と、Margaret との間で交された会話に於ける、対話の回数および語彙と、続いて Mary に Mary の夫の生存の情報を持って来てくれた、かつての Mary の求婚者で、かつ今は亡き（ということに一たんはなっていた）夫と同じ職業の船員である Stephen との間で交された対話回数および語彙を、量的に比較してみる。そうすると後者の場合の方が、いずれも勝っているのである。

| 算用数字は使用された語彙の数を示す<br>ローマ数字は対話の回数を示す | I     | II     | III                 |
|-------------------------------------|-------|--------|---------------------|
| Margaret↔Parker                     | 6 ↔35 | 8 ↔114 |                     |
| Mary↔Stephen                        | 8 ↔71 | 6 ↔44  | could not speak ↔50 |

そしてその対話のやり方をみても、Parkerの方は単刀直入に Margaret に事実そのままを伝えるが、Stephenの方は三回にわたって応答していることから推察できるように、ずいぶん分念が入っている。Stephenは二回目の対話の時には“*And whom do you think I saw standing on deck, well and hearty, only a bit thinner than he was five months ago?*”と全く気を持たせるような発言をしているのである。又 Parkerは Margaret に吉報をもたらした時に、ノックに応じて出て来たのが Margaret であったことにほってして、“*I was afraid it might be your sister Mary; for I hate to see a young woman in trouble, when I haven't a word of comfort to whisper her.*”と気をつかうのであるが、これは Margaret に対する優しい気遣いというよりも Mary に対する優しい気遣いであることは、引用文中に示されている通りだ。一方 Mary に吉報をもたらした Stephen の方は、ノックに応じて登場した人物は Mary であるのが当然と言わんばかりの態度で、Margaret に対する優しい気遣いはどこにもない。即ち Parker にしても Stephen にしても、Mary だけには優しい気遣いを示しているのである。さらに又、Parker にしても Stephen にしても、一番最初の直接的な情報の確認者ではなく、前者はたまたま投宿した飛脚からの、後者はひょっとしたら Mary の義母になったかもしれぬ Stephen の母からの情報に基づく、又聞きがきっかけになっているのである。又前者は情報を確認してから三十分以内に訪れており、後者は十分もたたぬ中に、老母の話をそこそこに聞いて、押取り力でかけつけたのである。従ってノックの仕方前者は穏やかであり、後者は激しい。その結果情報が二人の女性に伝えられた時も、作者は、Margaret には Parker の存在が「判った(knew)」と表現させ、又 Mary には Stephen の存在を「認識した (recognized)」と表現させている。これらの表現の語彙は、いずれも二人の性格にマッチしない他者の認知の仕方であり、むしろ両者が逆の認知をしていた方がふさわしいように思われる。又、Margaret は夫の生存の確認をする前はもちろん、その後でもなおも“*the breath of winter*”のように、まるで犯罪者でもあるかのように、悶悶と眠られぬ一夜を過しているというのに、Maryの方はこれと極めて対蹠的に夫の生存の確

認の前後を通じて、静謐な諦念に似た安らかな感情で支配されていることも忘れてはならない。Hawthorne の無意識層には、善意があったのだという私の前提が正しければ、Hawthorne がこの作品の中で希求していたものは、静謐な諦念の心情に、プラスの評価を与えることであったということになる。とすれば、情況証拠はいずれも、Maryの方がこの作品の主人公だったのではなかろうかと思わせるに十分である。

さらに第三の証拠は以上の作品全体の分析から生じたものと言うよりも、むしろこの作品が書かれた頃の作者自身の状況を記録した伝記について検討するという、伝記批評の形をとって提出されねばならぬ。そもそもこの作品が書かれたと推定される時期に前後して、作者は“The Haunted Mind”なる essay を表わしている。この作品は F. O. Matthiessen にさよって、「メルヴィルの黙殺にもかかわらず」、わざわざ Hawthorne の項の一章の標題にれる程の価値評価を与えられた。彼は Hawthorne の感受性を Keats の否定的能力と同一位相に於て捕え、“It describes the sensation of waking up at midnight, ‘when the mind has a passive sensibility, but no active strength: when the imagination is a mirror, imparting vividness to all ideas, without the power of selecting or controlling them.’”<sup>7</sup> と Hawthorne の原文を巧みに引用し、これが Freud 的精神分析にたえうるものと見なしている<sup>8</sup> のである。この観点に立って、今一度“The Wives of the Dead”を考察すれば、Maryには自分の主人の死を受動的に物哀しくたえようとする姿勢がうかがわれ、“negative capability”が彼女の姿に投影していることに気づくのである。いわば“The Haunted Mind”の女性版が“The Wives of the Dead”に於ける Mary の姿なのだ。とはいえ、後一步のところでは私は F. O. Matthiessen と見解を異にする。私は Mary をむしろ“The Haunted Mind”の antithesis とみるだけで満足する、Mary の心を既に何回も述べたように教条的な精神分析のテストにかけることには、ためらいを感ずるのだ。

ところで十九才で父を失った Hawthorne にとっては、少年時代は寂しい生活の連続であったに違いない。S. Manley によると、「彼の父が航海に出たのは丁度、今日勤め人が事務所や会社に通うようにありふれたこと」<sup>9</sup>であったという。だから Hawthorne 自身も、当時の Salem の習慣通りに「海と地方史に最も」<sup>10</sup>興味を引きつけられていたのである。この伝記的事実も“The Wives of the Dead”の冒頭に於ける“The following story, the simple and domestic incidents of which may be deemed scarcely worth relating, after such a lapse of time, awakend some degree of interest, a hundred years ago, in a principal seaport of the Bay Province.”という描写と完全に一致する。又、Hawthorne の母親は世間を殊更に避けて、とじこもりがちであった<sup>11</sup>と言うのであるが、この母親の態度が、Mary の態度にほぼ完全に表現されていると言えないであろうか。

以上の観点よりおして、私はこの作品に Mary という唯一人の女性の心の葛藤を描いたものであるという結論を下したい誘惑を強く感ずるのである。つまり、Margaret は実在しなかった女性であり、Mary の意識の中にある悪の要素が夢の中に象徴されたところの、Mary 自身の分身であったと考えたいのである。しかし私は断定を下しているのではないから、極めて曖昧なる分析であると非難される覚悟はしている。だが曖昧極まるものを、一刀両断式に裁断してみせて一見正確な二元論的判断を下すことは、それは正確主義的な誤謬を犯しているのであって、その実正確そのものなのではない。曖昧なものは曖昧なままで、否その曖

味さの由来する根拠とその限界を正確に呈示してみせる作業が、言葉の真の意味に於ける正確さということではなかろうか。

こういう論法は勢い作品のジャンル論とも密接な関係を生みださずにはおかない。“The Haunted Mind”は明かにロマンスではなく、スケッチであり、一種の理論でもある。私はこの作品の女性版が“The Wives of the Dead”であると述べたが、男性版の方は“Roger Malvin’s Burial”であろう。だが男性版の方は明かにロマンスと言い得るが、この女性版の方は、果してロマンスと言い得るだろうか。ここにはロマンスとスケッチと、いやひょっとしたら自伝の要素すら混融しているとも言えるのである。この事実に着目するならば、われわれはこの作品が鮮やかに裁断されないからといって何も苛立つ必要はない。むしろその方が自然なのである。

### III

こうして Hawthorne 自身はこの作品を「ほとんど語る値打ちもない簡単でありふれた出来事」と冒頭に断っているにもかかわらず、極めて多くの問題を包含した複雑な作品であることが判って来た。Mary が主人公であるにしても、Ethan Brand や Rappaccini の如き、Faust 的な相貌をたたえた強靱な男性主人公群と異って、極めて受身で寂しい性格の女性主人公に他ならぬ。彼女の性格の中には前掲の男性主人公たちと異って、曖昧に善・悪の心の要素が穏やかな葛藤を続けていくのである。そしてその葛藤は次第におさまっていくが、それと比例するかのようになり、Mary の心の緊張度も高まっていくのだ。この点につき、今度は心の動きに照応する自然の描写について見てみよう。象徴的な自然描写がありありと伺われるのは、夫の生存の情報が深夜もたらされる時の気象状態である。Parker が立ち去った直後は、夜の角灯の光が街路にゆらめいて、事物はぼんやりとした輪郭を保ちながら、混沌のさ中で帰趨を定めかねる秩序のように、あるいは過去をさまよう思い出のように、Margaret の眼には映じていたのだ。ところが Stephen が立ちよった時刻になると、雨は止み嵐は治って、今しがた降った雨のため出来た小さな水たまりが、月光の中で僅かばかりの微風にもゆらめいて銀色の細波をたてていた。即ち前者にあっては不愉快な曖昧さであり、後者にあってはまるで細密画を見るように、いわば平和な精神の細いひだ迄写したそうとする、象徴図の趣きを呈している。この後者のくぐりには、有名な Hawthorne の、月光の中に於けるロマンス論、即ち「月光の中では、かねてなじんでいる事物が微細な点に至る迄ははっきりと見え、それが白昼見た時とは異った様相を呈し、この世のものとも思えぬ精神化された事物と変る。」<sup>12</sup> という描写を想起させる。だが、この月光論の場合ほど、精神の緊張度は、飽和度は高くない。「水溜りの細波」の微小性と「かねてなじんでいる事物」の微小性では、いささか次元を異にし、前者の事例では適用される範囲が一層狭く、一層慎ましくなり、従って曖昧になる。

さらに銘記すべきことは、これも有名な Hawthorne のロマンス論の根拠とされた所謂現実世界と空想の接触する中立地帯の説明であるが、これと全く完全と言ってよい程照合する中立地帯の説明を“The Haunted Mind”の中に見いだすことが出来る。それは Margaret の寝室と Mary の寝室の中間に介在する居間のことであり、これを作者ははっきりと“the



intermediate apartment' と謳っているのであるが、これも月光論の場合程歯ぎれが良くない。いわば中間地帯がゆるぎなき実体としてはっきり措定されているわけではない。中立地帯であるこの居間の中に主を失った二脚の椅子が、今は火が消えていることの方が多いいけれど、かつては家庭の団欒を象徴した暖炬の反対側に置いてあって、さらにその傍には今は未亡人となった二人のうら若い女性の椅子がちょこんと置いてある。又この居間にあると推定される窓も、前半 Margaret が叩き起された時は掛け金が閉まっていたが、後半 Mary がノックの音で自然に眼を覚ました時には不思議にも掛け金は開いたままであった。又、ノックの度に二人の女性によってともされるランプの光にしたところで、Lang は夫の帰還を待つ希望の火<sup>13</sup> と楽天的に解釈するが、Hawthorne の自身の描写では「ランプの冷たい光」とかあるいは「ランプの死んだような光」と、むしろ死の陰影が漂っている。まことに象徴的な二元的対立の描写が続く。我われの仕事は中立地帯、即ちロマンスの発生源だけを見つけて終ることは出来ない。この安定せず細波のように揺めく中立地帯の中では、上述のように限りなく二元的対立が重層的に反復されていくので、この調子でいくと無限小の世界に迄中立地帯を追求していかねばならないような気がする。

そもそもこの中立地帯を生みだすのに必要十分条件であった、二人の女の寝室にしたところで、左右対象の位置にあるらしく、それはその寝室をさえぎるカーテンあるいはドアで示されている。即ち二人で一しょに就寝した時のカーテンやドアの状態と、夜中に Mary が眼を覚ました時の状態は異っているのである。そもそも、この寝室にいくら二人の未亡人にしたところで、既述のように性格の上からも動と静という二元的対立があるだけでなく、夫の死の知らせが届く日も二日連続であり、又その復活の知らせが届くのも継時的であり、ここにも二元的構造が見られる。この微妙な時間のずれの現象を決して Lang のように、「同時の死亡と同時の復活」はあり得ぬと称して、看過してしまうことは出来ない。Hawthorne は決して同時とは言っていないからである。

そもそも彼女たちの夫の職業の位相が、又二元的対極的な位置にあった。Margaret の主人は陸上生活者であり、どうやら意志に反して応召したものであるらしく、カナダとの戦争という人災に巻き込まれての死である。Mary の主人は海上生活者であり、どうやら自らの意志によって船員となり、それが大西洋の嵐という天災にまきこまれて死んだのである。こうして、微妙な二元的構造は、中立地帯の内包概念に即してその範囲を限定してみても、又その外延概念に即してその範囲を拡大してみても、即ち無限小の方角を見てみても、無限大の方角を見てみても、限りなく放散していくばかりである。このことの意味は、Hawthorne 文学の一つの主題である egotism を、ともすればゆるぎなき固定した実体として捕える傾向から救ってくれるということではなかろうか。結局 Hawthorne の描いた egotist は Pascal の言う無限大と無限小の間に漂う漂流者なのであった。S. Manley が「ホーソーンは海で死ぬことも、裕福になることもかなわず、ただ彼に出来たことと言えば最も熟練した船員よりもっと巧みにアメリカの想像力の世界という珍しい海岸を探検することだけであった」<sup>14</sup> と言っているのは、おそらくこの間の事情を述べたものであったろう。もとより二人の未亡人の家も、又、海に面していたのであった。

## 註

- (1) Nathaniel Hawthorne, "The Wives of the Dead" in *The Complete Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (Doubleday & Company, Inc., 1959), P. 513.
  - (2) H. J. Lang, "How Ambiguous Is Hawthorne?" in *Hawthorne* ed. A. N. Kaul (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1959), P. 88.
  - (3) Neal Frank Doubleday, *Hawthorne's Early Tales, A Critical Study* (Duke Univ. Press, 1972), P. 217, footnote.
  - (4) Sigmund Freud, *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse* (1916-17). 邦訳は高橋英夫訳「精神分析入門」, 『フロイトの思想』(河出書房, 1962), P, 221.
  - (5) Erich Fromm, *The Forgotten Language* (Rinehart & Company, Inc., 1951), chap. 4.
  - (6) Hawthorne, *op. cit.*, P. 511.
  - (7) F. O. Matthiessen, *American Renaissance* (Oxford Univ. Press, 1941), P 232.
  - (8) *Ibid.*, pp. 232-33.
  - (9) Seon Manley, *Nathaniel Hawthorne, Captain of the Imagination* (New York: The Vanguard Press, Inc., 1968), P. 19.
  - (10) *Ibid.*, P. 20.
  - (11) *Ibid.*, pp. 20-21.
  - (12) Hawthorne, "The Custom House" in *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. Roy Harvey Pearce (Ohio State Univ. Press, 1962), 1, 35.
  - (13) Lang, *op. cit.*, P. 89.
  - (14) Manley, *op. cit.*, P. 18.
- (補註) Freud のシンボルによれば, 「部屋」が女性の生殖器を意味し, 「旅行」は死を意味するとい  
う。これらの半ば定式化されたシンボルを使ってこの作品を分析することも可能であろう。正に「部  
屋」と「旅行」が, 夢の中に重大な主題として表現されているからである。だが果して Mary の心  
の中に性慾を発見して何になるのだろうか。又旅行が死を意味していることは, 少なくともこの作品に  
於ては, 何も精神分析学の助けを借りなくとも, 一目瞭然たる事実である。だからそれらは安易にす  
ぎ, Freud 自身もこれらのシンボルの使用や翻訳の乱用をいましめているので, 精神分析的な意  
味に於て公式的に使用することはなるべく避けた。精神分析学的手法のみに頼って, この作品を分析  
することは私の本意ではないからであった。

### Summary

#### What Happened in Nathaniel Hawthorne's "The Wives of the Dead"

#### Keijiro Unoki

There are various levels of ambiguity in Hawthorne's tales. "The Wives of the Dead", a lyric but somewhat neglected tale, is a good example of an ambiguity, in which the meanings of two dreams are intermingled inseparably. H. J. Lang thinks the meaning of this tale is open to reason and observed the last sentence carefully. He says, "Here is a paradox: if we read the story on the realistic level, it is somewhat unprobable; read as a dream, it is perfectly natural: the widows would dream of their husbands' return". Lang's guess is that Hawthorne would not have minded people reading the story as reality. I agree with Lang's guess, not because his analysis seems true, but because his guess comes to an agreeable conclusion. (But our effort to analyze completely the meaning of this tale would be in vain, either on the realistic level or on the Freudian analytic level.) Mary dreamed the two dreams in this tale: this is my conclusion. But why such a conclusion? And for what? Because there is Hawthorne's strong sympathy for Mary's passive reserved attitude as a widow. And because Mary plays a symbolic and important part in the tale, reflecting Hawthorne's real mother's solitary image just as a pool in the mud reflects the moonlight. A singular series of numberless dualistic constructions develops infinitely in the tale: that is what I wonder at; that is what causes me, as I look at, to draw a deep breath, and perhaps some figure like Pascal to come to my eyes. A Female Pascal, of course, and a timid Pascal, and a symbolic representation of a widow. So this tale is the fantastic reproduction of "The Haunted Mind" for woman's use.